

西ウイグル王国とシルクロードの繁栄

MORIYASU Takao
森安孝夫

1 はじめに

かつて一九七〇年代の初めに、東京の平凡社から「東西文明の交流」というシリーズ名で全六巻の優れた歴史書が出版されました。その第一巻は私の恩師である護雅夫が編集した『漢とローマ』、第二巻は後に大阪大学で私の先任教授となる山田信夫が編集した『ペルシアと唐』、そして第四巻は私が最初に赴任した金沢大学の先任教授であった佐口透が編集した『モンゴル帝国と西洋』でした。

この三冊の書名がいかに象徴的なのですが、中央ユーラシアの周辺にあった大農耕文明圏を経済的・文化的に結びつけるネットワークであったシルクロードは、中国を中心とする東側の視点に立てば漢代と唐代とモンゴル帝国の元代におおいに繁栄したと考えられてきました。裏を返せば、その中間にはさまる三〜六世紀の



図1：西ウイグル国王（可汗）、敦煌莫高窟第409窟壁画。

魏晉南北朝時代と一〇〜一二世紀の五代〜宋遼金代にはシルクロードは衰退していた、とみなされることが一般的だったのです。しかし研究の進展によって、そうではないことが徐々に明らかになってきたのです。五代〜宋遼金代すなわち一〇〜一二世紀にもシルクロードが繁栄していた証拠としては、まずなによりも敦煌周辺の莫高窟や榆林窟・西千仏洞などに残された華麗な仏教壁画が挙げられるでしょう。壁画というのは高額の顔料を惜しみなく使うもので、それを可能にしたのは財力のある王族・貴族やシルクロード商人をはじめとする富裕層がパトロンとなったからです。ですから前近代の中央ユーラシアで豪華な壁画のある寺院や宮殿・邸宅などの存在が確認されれば、それ自体がシルクロード貿易の繁栄を裏付けていると考えて差し支えないわけです。とはいえ壁画

の存在だけでは万人を納得させることはできません。それゆえ私を含む日本人研究者や榮新江・北京大學教授をはじめとする中国の研究者たちは、多言語に及ぶ敦煌文書やトルファン文書を駆使して、その歴史的背景を明らかにしてきました。中国の敦煌研究院が千年に及ぶ敦煌壁画の時代区分として、「曹氏帰義軍期」と「西夏期」との中間に「沙州ウイグル期」を置いたのは、私の研究がきっかけとなったのです。沙州とは敦煌のことです。

一〇世紀前後に中央ユーラシア東部のシルクロードを押さえて繁栄していたのは西ウイグル王国と張氏・曹氏の敦煌王国（河西帰義軍節度使政権）とコータン（于闐）王国ですが、一一世紀になると西ウイグルのほかは西のカラハン朝と東の西夏王国に代わります。一〇世紀前後に描かれた莫高窟や榆林窟などにある壁画は、まずなによりも敦煌王国（帰義軍政権）の繁栄を物語りますが、有名なコータン王・李聖天や西ウイグルの可汗・王妃の描かれた壁画もあるのです【図1、2】。後者は長らく西夏王と王妃と見なされていたのですが、私の指摘により認識が改められたのです。もちろん一一世紀以降の西夏時代の壁画もたくさん在証されています。

本稿では、新疆ウイグル自治区トルファン地区にあるベゼクリク千仏洞に着目し、そのウイグル仏教壁画の裏側にはマニ教壁画が眠っていたという衝撃的な事実を取り上げます。そして従来の欧米や日中の東洋学界でウイグル



図2：西ウイグル国王妃、敦煌莫高窟第409窟壁画。

風仏教壁画を八〜九世紀とか九〜一〇世紀とか古く見積もる傾向にあった点に反論し、それが主に一一〜一二世紀（どんなに早くても一〇世紀後半）に編年されるべきこと、従って一一〜一二世紀にもシルクロードは決して衰退していなかったことを論じます。

なおこれは、一〇世紀どころか八世紀中葉の安史の乱以降、モンゴル帝国時代まで、陸のシルクロードは衰退していたという見方が今なお根強く残っている欧米学界への反論でもあります。

2 古代ウイグルと現代ウイグル

皆さんはウイグルと聞けば、まずは現在の中華人民共和国の新疆ウイグル自治区にいたるウイグル人を思い浮かべるでしょう。しかしこのウイグルという民族集団名は、唐代〜元代において中央ユーラシア東部のモンゴル高原〜天山南北路一帯にかけて活躍した本来のウイグルにちなんで、二〇世紀前半に政治的意図をもって復活・採用されたものです。

古い時代のウイグル人は、元来はモンゴル高原にいたトルコ系言語をしゃべる騎馬遊牧民で、我々と同じ黒髪・黒目で扁平な容貌のモンゴロイド（黄色人種）でした。漢文史料には廻紇・回紇・回鶻などという形で現われます。しかし九世紀中葉にモンゴル高原から天山南北路一帯に民族移動した結果、

その先住民の多くを占めていたコーカソイド（白色人種）の印欧語族やモンゴロイドの漢民族と混血してゆき、現代ウイグル人のように様々な身体的特徴を持ち、青い眼・黒い眼・茶色の眼、黒髪・茶髪・金髪が混在するようになったのです。西ウイグル王国で被支配者となった先住民はほとんど農耕都市民でしたから、混血が進んだ後のウイグル人には農業や商工業に従事する者が増え続け、家畜の放牧は維持されるものの、純粋の遊牧はいっしか消滅していきました。

一方、言語だけはウイグル語や後述するカラハン朝の言語などのトルコ系諸語が先住民の印欧語であったトカラ語・コータン語・ソグド語などを駆逐してしまいました。隋唐代に使われていた漢語が現在のように再び幅をきかすようになるのは、清朝により新疆省が設置された一九世紀後半からです。

現在のウイグル人はほぼ全てイスラム教徒ですが、本来のウイグルは最初は北方遊牧民の常として天を敬うシャーマニズムを奉じ、中央ユーラシア東部に覇を唱えた東ウイグル帝国時代（七四四～八四〇年）に支配層が国教としてマニ教を採用し、次いで主要部がモンゴル高原から東部天山地方に集団移動して建国した西ウイグル王国時代（九世紀中葉～一三世紀初頭）でも最初はマニ教を奉じていましたが、一〇世紀後半～一一世紀初めに国教をマニ教から仏教に変えていったのです。そして一部には景教（かつてネストリウス派と呼ばれた東方シリアキリスト教）を信じる者もいました。

モンゴル帝国（元朝時代）までは元来のウイグルという集団が厳然として存続していましたが、その後一六世紀までにウイグルという集団と名称は徐々に消えていきます。今の新疆ウイグル自治区でもタリム盆地周辺にいる人々は、それぞれのオアシス都市の名前をとって呼ばれるようになりました。例えばトルファン人とカクチャ人とカコータン人とカカシュガル人というふうです。

一〇世紀以降、今の新疆ウイグル自治区の東半部には仏教国といつてよい西ウイグル王国がありました。西半部ではトルコ系諸集団の中で初めてイスラム教を奉じるようになったカラハン朝が支配するようになり、その西から押し寄せるイスラム化の波が一五～一六世紀までには全体を覆い尽くしてしまつたのです。その結果、二〇世紀前半に旧新疆省の各地に点在するトルコ系でイスラム教徒の諸オアシス民をまとめるという政治的目的で、古い時代に内陸アジアで勇名をとどろかせたウイグルが統一的名称として採用されたわけです。ですから現代ウイグルは騎馬遊牧民ではありません。

3 高昌故城とベゼクリク千仏洞

新疆ウイグル自治区の南半分を占めるのは、平均で海拔一〇〇〇メートルのタリム盆地ですが、その東北部にあつて、海拔ゼロメートル地帯であるため鍋底のような酷熱と極度の乾燥で知られるのがトルファン盆地です。東西がおよそ二〇〇キロメートル、南北は七〇～八〇キロの大盆地ですが、そこは紀元前後までは車師国といつてコーカソイドの住むところでしたが、漢民族が河西回廊を越えてさらに西域に進出しようとした時には、真つ先にその橋頭堡となるべき位置にありました。それゆえ漢代より漢人による植民地化が徐々に進み、五世紀末には麴氏高昌国という漢人政権が成立しました。それが六四〇年に唐帝国に占領されると、西州という唐の直轄領となつたのですが、安史の乱と北庭争奪戦を経た八世紀末以降は東ウイグル帝国の勢力下に入り、九世紀中葉からは西ウイグル王国の主要な領域となりました。

そのようなトルファン盆地には麴氏高昌国時代から西ウイグル時代に



図3：高昌故城と火焰山の空撮、周囲の緑地は農村。
出典：S. N. C. Lieu et al. (eds.), *The Church of the East in Central Asia and China*. Turnhout: Brepols, 2020.



中央ユーラシアの遺跡地図

かけて二二～二四の都城（市町村に相当）があったのですが、それらのほぼ中央部に、現在も人々の暮らしがある緑のオアシスに囲まれて、高昌故城とかカラ・ホージャとかイディクート・シャリーとか呼ばれる巨大な都市遺跡があります。これが麴氏高昌国の首都高昌、唐の西域支配時代の西州の治所、ウイグル時代のKochang（コーチャウ、高昌）という、中央アジア有数の規模と繁栄を誇ったオアシス都市の遺跡です。その大きさは東西も南北も約一五〇〇～一六〇〇メートルの不整形の四角形であります。【図3】

この遺跡から北方を望めば、すぐそこに赤茶けた山肌を持つ火焰山（キジル山＝紅山）が壁のように連なっているのが眼に入りますが、天気の良い日にはその向こうに白銀の万年雪をいたたく天山の峰々が顔を見せます。トゥルファン盆地の諸オアシスは悠久の昔から全てこの天山の雪解け水によって成り立ってきたのですが、火焰山を貫いて高昌故城周辺のオアシス一帯に地表から水を運んで来たのはムルトウク河とその支流です。今でこそカーレーズという独特の地下灌漑水路が発達していますが、それが導入される近代以前においてはこれらの河川や自然の地下水こそが高昌地方の重要な水源であったのです。

高昌故城から北方に自動車で現代の道を辿ると走行距離八キロ程でセンギム・アグズ（勝金口）、即ち「センギムの口」と呼ばれる谷口に着くのですが、そこからさらにムルトウク河が見え隠れするくねくねと曲がった道に沿って七キロほど遡ったところにベゼクリク千仏洞と呼ばれる有名な石窟寺院群があります【図4】。高昌故城からの道のりでは一五キロほどになります、直線距離では一〇キロほどです。ムルトウク河谷の右岸の絶壁に造られたこの石窟寺院群は、シルクロードの一大都会たる高昌に付随して営まれた宗教的聖地であり、それは敦煌における莫高窟、クチャ（亀茲）における



図4：ムルトウク河右岸のベゼクリク千仏洞より天山を望む。著者撮影

キジル石窟やクムトラ石窟に匹敵するのです。

もちろんキジルにせよクムトラにせよ、あるいは莫高窟にせよ、これらがいずれも仏教の石窟寺院であったことは改めて説明を要しません。それゆえ一般にはそこに仏教以外の僧侶が長期に互って住んだことなど、想像だにされなかつたでありましょう。ところがベゼクリク千仏洞には、ある時期、マニ教が行なわれていたことを示す明白な証拠があるのです。それがこれから論及するマニ教・仏教二重窟です。

4 ベゼクリク千仏洞のマニ教・仏教二重窟

マニ教を国教として採用したのは、世界史上ウイグルだけであり、ウイグルがマニ教を国教としていたのは八世紀後半～一世紀初めです。その前半に相当する東ウイグル帝国時代のマニ教の遺物は、現モンゴル国のオルホン河中流域に十数個の断片が残るカラバルガスン碑文だけです。この碑文は龍頭と土台である亀趺を除く本体の碑身を推定復元すると、高さが約四メートル、横幅が一メートル七〇センチ強、そして厚さがなんと七〇センチもある巨大碑文であり、突厥文字ウイグル語・ソグド文字ソグド語・漢文の三つの言語で刻されていました。これについては私と吉田豊・京大名誉教授が最新の研究を発表していますが、ここでは触れません。

一方、西ウイグル王国時代のマニ教信仰を証明する遺跡・遺物は、トゥルファン盆地や敦煌莫高窟から多数発見されています。そのなかにはウイグル語やソグド語の文書類もありますが、なんとといっても興味深いのは、ウイグルが一〇世紀後半～一世紀初めに国教をマニ教から仏教に変えた証拠となるベゼクリクのマニ教・仏教二重窟であります。それはどういうものかという

と、元はマニ教窟であったところの内側に日干しレンガを積み上げるなどして新たな壁面を作り、そこに仏教壁画を描いて仏教窟に改修したものです。

とはいえベゼクリクの仏教窟の開鑿は六～七世紀から漢人によって始められていたのであり、マニ教徒はそれを再利用すべく先ずは仏教窟だったところに壁の上塗りなどの簡単な内装を施してマニ教窟に造り替えたのです。それが九～一〇世紀のいつかの時点であり、さらに西ウイグル王国の国教がマニ教から仏教に代わった時点でマニ教窟の内側に日干しレンガなどで厚めの壁を構築し、その壁面を整形して仏教壁画を描いたのです。漢人仏教窟→マニ教窟→ウイグル仏教窟と変わってきた洞窟の歴史を考えれば、これを三重窟ということもできますが、構造的にみればやはり二重窟と言うのが適当でしょう。

もちろん上層階級がマニ教徒であったウイグル人がトゥルファン盆地を含む東部天山地方を支配したからといって、ベゼクリクの全ての仏教窟がマニ教窟に変えられたわけではありません。ベゼクリクに現存する洞窟は約五〇であり、そのうちどれほどがこのような二重窟になっているのかは現時点では知るよしもありません。なぜなら、現存する仏教壁画を破壊してまで、裏側にあるかもしれないマニ教窟を確かめることはできないからです。それでも、いくつものところでは後に作った仏教窟の壁面が崩れ落ち、元のマニ教窟の壁面が露頭しているのです。どうやらマニ教窟は、それ以前の仏教窟の全面を真っ白い漆喰（石灰）で覆い尽くし、その上にマニ教的な壁画を描いたり、赤や黒や銀灰色で銘文を書き加えたりしたようです。その典型が現地の最新番号による第二七窟（グリユンヴェーデル番号の第一七窟）と第三八窟（グリユンヴェーデル番号の第二五窟）です。ただ第二七窟には現在判明している限りではマニ教徒による幾種類もの銘文があるだけですから、次に

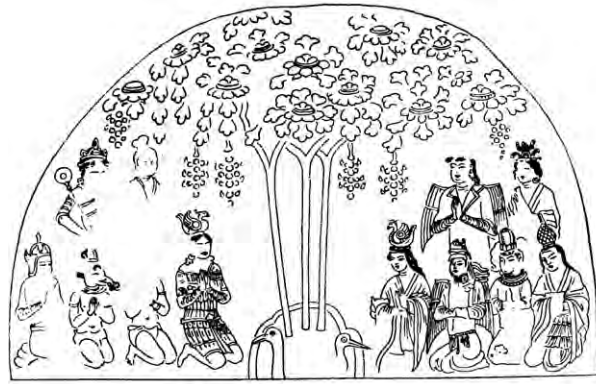


図7：ベゼクリク千仏洞第38窟正面壁画。
出典：A. Grünwedel, *Alt-Kutscha*. Berlin, 1920.



図8：ベゼクリク千仏洞第38窟正面壁画。
出典：J. Hackin, *Recherches archéologiques en Asie Centrale* (1931). Paris, 1936.



図5：ベゼクリク千仏洞第38窟の二重窟の様子、奥から出入口の方へ向けた構図。著者撮影



図6：ベゼクリク千仏洞第38窟正面壁画。著者撮影

スケッチ【図8】も並べて掲載します。

それによってまず壁画の細部を見てみましょう。幅広い葉、巨大な花とブドウの房状の果実、そしてそれぞれが二又に分岐する二本の細い幹を持つ樹木が中心のモチーフであることは、一見して明らかです。一九二二年出版の著書で本窟を初めて紹介したグリユンヴェーデルは、本窟がやや複雑な二重構造になっていることを見取図付きで記述し、奥壁にあるこの「特異な絵画」にも言及しましたが、それをマニ教のものであるとまでは断言していませんでした。この「特異な絵画」を第二次世界大戦以前にマニ教のものとして指摘したのは、ロシア隊のオルデンブルクとフランス隊のアッカンですが、彼らの根拠はドイツ隊のルコックによってトゥルファンで発見されたマニ教文献に残る細密画（ミニチュール）【図9】との類似性という美術史的なものだけでした。この細密画には、仏僧とちがって剃髪せず、白衣白冠を着用する典型的なマニ僧が描かれています。それと一緒に描かれた樹木は二又に分岐する幹だけでなく、こんもりとした緑の葉に大きな花、そしてなによりもブドウの房状の果実を持ち、問題の壁画と本当によく似ています。

その後、一九七〇〜八〇年代になり、この正面の壁画の中心主題である三本幹の樹木は、マニ教の「生命の樹」であり、「光の国」すなわち天国の象徴であるという見方がドイツのマニ教研究者であるアーノルド・ドーベンやクリムカイトらによって広められてきましたが、それでもなお、誰一人それがマニ教壁画であることを決定的に証明した者はいなかったのです。

私は一九八七年に阪大助教の立場で三菱財団より資金援助を受け、初めてベゼクリクを訪れて予備調査をしました。そして翌一九八八年には吉田豊氏（当時は神戸市外大助教）と共にベゼクリク千仏洞のより広範で精密な内部調査を実施することができました。その成果として、第三八窟（グリユン

は幸いにも壁画が露出していている第三八窟を紹介します。【図5】

5 ベゼクリク千仏洞第三八窟のマニ教壁画

第三八窟は、それほど堅くない岩の断崖に横から穴を開けて作られたもので、奥行き八メートルほど、幅二メートル半、床面からカマボコ型天井の頂上部までの高さが二メートル三〇センチほどです。本窟がいつ開鑿されたかは不明ですが、一番最初は仏教僧侶が居住する僧坊として使われたらしく、長期間煙に燻された痕跡があります。奥壁にはマニ教壁画があるのですが、その下側には窪みがあり、さらにその下には泥土でベンチあるいはベッド状のものが造り付けられています。そこに一人の人間が横たわることは十分可能です。さらにその奥壁の左下方には、もつと奥に通じる細い通路があります。その奥は押し入れとして使われたのかもしれないかもしれません。いずれにせよマニ教窟はこの生活臭の強い仏教窟の全面に真っ白い漆喰を塗って化粧し、奥壁（正面）と側壁の一部にマニ教独特の壁画を描き、ウイグル語の銘文を書き加えてでき上がったものです。

正面（奥壁）にある三本幹の樹木を中心とする壁画は、中央アジア各地の仏教壁画を見慣れた眼には実にあっさりとしたものに見えます。それは仏教壁画のように滑らかに仕上げられた画面ではなく、地の岩壁に直接白い漆喰を塗っただけの画面であるため凹凸がまだ残っていて、細部にまで筆が行き届いていないこと、配色が少ないせいでしょう。さらに発掘後の破損や褪せもあり、私が一九八〇年代に撮影した写真【図6】だけでは細部が分かりにくいので、ここには一九〇〇年代にドイツ隊のグリユンヴェーデルが描きおこしたスケッチ【図7】と、一九三〇年代にフランス隊が描いたカラー



図9：白衣白冠のマニ僧と生命の樹、高昌故城遺跡K出土の細密画。
出典：A. von Le Coq, *Die buddhistische Spätantike in Mittelasien, II, Die manichäischen Miniaturen*. Berlin, 1923.

ヴェーデル編号の第二五窟)の正面壁画の上に書かれたウイグル語銘文に「*quixiklar quvrayi bu aiur*」これは守護霊たちの集まりである」とか、「*nan savit bidim yazuq bolmazun*」私セヴィトが書いた。罪過がありませんように!」とか、マニ教徒の祈りや手紙での挨拶の決まり文句であるバルティア語由来の「マナースタール・ヒルザー *masar xirza*」私の罪を赦したまえ!」などのマニ教的表現があるのを発見し、本窟の壁画と銘文が確実にマニ教徒のものであることを初めて証明したのです。

なお二本幹の樹木の周囲には、ほとんどが礼拝のポーズを取っている人物が二人(左右に六人ずつ)描かれています。壁面に残るウイグル語銘文を解読した結果によれば、二本幹をはさんで向きあっている最も内側の二人が、本マニ教窟改修に財政的援助をした俗信徒のウイグル貴人夫妻であり、それ以外の天使のような翼をもつ人物や象の頭をもったり腰巻を着けた人物など

ません。マニ教はグノーシスの宗教とも言われているのです。

6 ウイグル仏教壁画の編年修正

ベゼクリク第三八窟でマニ教窟の後に造営された仏教窟は、真ん中より奥が破壊されたためマニ教窟が露出しました。現状で残る仏教窟は、マニ教窟の真ん中よりやや前方だけで、出入口に向かって右側から天井にかけ、日干しレンガで新しい壁をしつらえる形で作られました[先の図5参照]。左側の壁はもとの壁を薄く上塗りしただけです。マニ教窟よりかなり小さいこの仏教窟もカマボコ型の天井を持ちますが、それも含め壁面はいずれもマニ教窟に比べはるかに丁寧に仕上げられています。そこに描かれた壁画はいわゆるウイグル風仏教壁画画であります。以下ではその年代について考察しましょう。

私が一九九一年に発表した博士論文「ウイグルマニ教史の研究」と、それに続くいくつもの関連論文の内容をここで紹介することはできませんが、結論だけを言えば、ウイグルがマニ教を国教としていたのは八世紀後半〜一一世紀初めであるということです。すなわち、シャーマニズムを信じていた本来のウイグルは、東ウイグル帝国第三代の牟羽可汗(在位七五九〜七七九年)の時代に支配者階級がマニ教に改宗し、その反動で第四代可汗以後しばらくマニ教は迫害されましたが、第七代懐信可汗(在位七九五〜八〇八年)の時からマニ教は確固たる国教となり、次いで主要部が東部天山地方に集団移動した後の西ウイグル王国時代(九世紀中葉〜一三世紀初)でも最初はマニ教を奉じていたのです。しかし、新たに西ウイグル王国の領域となった天山南北路一帯にはすでに五〇〇〜六〇〇年以上の仏教の伝統があり、新たに被支配者となった仏教徒側からの圧力が徐々に増大したため、一〇世紀後半〜一一世紀

はみな彼等二人を見守る守護霊の集団なのです。前列左から二番目にいる象の頭を持つ神様は、元来はインドのガネーシャなのですが、シヴァやヴィシュヌらと共に仏教にもマニ教にも取り込まれたのです。

マニ教は三世紀にメソポタミアでマニが始めた創唱宗教であり、アニミズムではないのですから、自然界の樹木そのものが崇拝の対象となることはありません。現在までに分かっているマニ教の教義の中にはいくつもの象徴的な樹木が現われるのですが、結局は「生命の樹」と「死の樹」に収斂していくようです。そうであれば、現実に生きているマニ教徒の崇拝の対象となり得る樹木とは、やはり「生命の樹」を置いて他には考えられません。マニ教研究者のヴィーデングレンによれば、マニ教の「生命の樹」は、同じく古代メソポタミアの伝統に立脚していたマンダヤ教やシリアキリスト教の「生命の樹」の直接の影響を受けたものであり、それはブドウの木に似ており、葉は寶石で、実は真珠でできているということです。本窟の奥壁に描かれた樹木の果実も明らかにブドウの形をしています。またブドウの木をイメージしたのであれば、幹は細くて当然であり、構図的にも一本では貧弱でしょう。枝分かれの仕方も大木になる常緑樹などと違って、確かにブドウの木のそれに似ています。

結論として我々は、この壁画の主題を、マニ教徒が、「光の国」の象徴であり、また「光の国」へ帰った「マニ」自身の象徴でもある「生命の樹」を礼拝・賛美している場面とみて大過ないでしょう。さらに想像をたくましくすれば、この「生命の樹」は、病める人間の霊魂を治癒する力を持つもの、即ち無知なるがゆえに現世(物質世界)から霊魂(光の要素)を解き放さない人々に「グノーシス(霊知、覚知、神から与えられる直観的認識)」を与え、真の救済への道を歩ませる「グノーシスの樹」＝「マニ」でもあったのかもしれない。

最初に国教をマニ教から仏教に変えざるをえなかったのです。

そういう次第ですから、ベゼクリク千仏洞をはじめ旧西ウイグル王国領の各地の仏教遺跡に残るウイグル風仏教壁画は、絶対に一〇世紀後半を遡ることはなく、大部分は一一世紀以降に編年されるはずなのです。ところが、二〇世紀前半に列強の探検隊がこれらの仏教壁画を剥ぎ取って本国に持ち帰り、その成果として豪華な図録が出版されると、それを研究した美術史家たちのほとんどがウイグル風仏教壁画画を八〜九世紀、もしくは九〜一〇世紀と編年したのです。たとえば次頁に挙げる壁画[図10]を掲載した原書のキャプションでは九〜一〇世紀となっており、一九九一年に日本で開催された『ドイツ・トゥルファン探検隊 西域美術展』の図録でさえも、ベゼクリクのウイグル風仏教壁画画のほとんどが九世紀と編年されているのです。

ところで私は博士論文に先行する一九八五年の「チベット文字で書かれたウイグル文仏教教理問答(P. 1206)の研究」という論文で、ベゼクリクのウイグル風仏教壁画画(以下では単にウイグル風仏教壁画画と呼ぶ)の主要部分の年代は、一〇〜一二世紀とすべきであろうと述べておきましたが、その見方を一九九一年の博士論文でいっそう確実なものとししました。そして時期をさらに限定して、早くても一〇世紀後半以降、主要部分は一〜一二世紀のものであると結論付けました。その際の大きな論拠がベゼクリクのマニ教仏教二重窟と、西ウイグル王国の冬の首都であった高昌故城にあるマニ教仏教二重寺院である遺跡a(アルファ)から出土した二つの史料、すなわちウイグル語の棒杭文書、及び表面がソグド語で裏面がウイグル語の紙文書M112(すずれもベルリン所蔵)でした。

遺跡aはその構造と出土文物から見て、先に考察したベゼクリクのマニ教仏教二重窟と同様の運命を辿ったマニ教仏教二重寺院遺跡であったと判断



図10：ベゼクリク千仏洞の豪華な仏教壁画。
出典：A. von Le Coq, *Die buddhistische Spätantike in Mittelasien*, IV. Berlin, 1924.



図11：白衣白冠で有髪のマニ僧、高昌故城遺跡α出土。
出典：東京国立博物館ほか（編）『ドイツ・トゥルファン探検隊 西域美術展』朝日新聞社、1991年

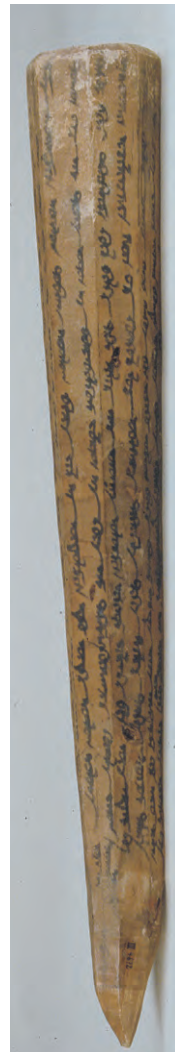


図12：ウイグル文棒杭文書、高昌故城遺跡α出土。
ベルリンのアジア美術館所蔵

されます。なぜなら表の仏教壁画を剥がしたら、裏からマニ僧の顔のある壁画が現われたのです【図11】。そして元のマニ寺を破壊して、その上に新たに仏教寺院を建てる際に、その檀越すなわちパトロンとなったウイグル貴人の男女一組（おそらく夫婦）が、仏教に帰依し、この寺院建設を推進する功德により未来に弥勒仏と邂逅するようにとの願文を書いて奉納したのが、遺跡αから出土したウイグル文の棒杭文書でありました。【図12】以下にその前半部分の和訳を掲げます。

さて、幸多くして幸いなる土の元素を持つサル（＝戊申）の歳に、選ばれし良い時に、運ある時に、第九月の二十四日に、Purva-phalguni星座の時に、我らの「日月神の如く好ましく美しく輝ける聖天ブグ」が智海天王の御位に即きし第二の年に、私たち、三宝（＝仏教）に對しゆるぎなく変わらぬ清浄な心をもてる優婆夷（＝清信女） テングリケン＝テギン＝シリグ＝テルケン＝クンチュイ王女と優婆塞（＝清信士） キュルグ＝イナンチ沙州將軍との私たち二人は、仏法に精通した賢き博士たちから、次のように聴いた：

「もしある者がクルミの殻ほどの大きさの寺院を建てれば、小麦の粒ほどの大きさの仏像を装備（？）すれば、芥子の粒の七分の一ほどの大きさの舍利を安置すれば、針のような仏塔の尖塔（相輪）を立てれば、最高の功德を獲得することになる」と。（さらに）「その功德の力によりて、上方は天上世界（＝天道）において（も）、下方は人間の肉身（＝人間道）において（も）、心にあるような（＝思い通りの）至福と喜びを享受して、後に仏果に達するためのヤーナ（乗り物）によりて、涅槃の境地に住することになる」と。

このような類いの非常に良いことを聴いた時に、私たちは二人とも平安な心持ちになって、この寺院を建造するために剝木を打ち奉った。この功德の力によりて、私たちは後世に精妙なる弥勒仏と邂逅しますように。（そして）弥勒仏から、仏果に至るための妙なる授記（一種の予言）を私たちが獲得しますように。その授記の力によりて百劫の間、三阿僧祇の間（長大な時間）、六波羅蜜（悟りを開くために実践すべき六つの徳目）を満たして、その後、仏の世界に生まれ変わることがありますように。

実はこの同じ高昌故城の遺跡αからは、表面がソグド語で裏面がウイグル語の文書 M112が出土したのです。そのウイグル語面の後半部分を抜粋しましょう。

土星のもとにある癸未年（九八三年）に、天王アルスラン＝ビルゲ四世たるスユングリユグ可汗の御命令により、テルケン王子殿下が旧内城の東方に建っている三輪（三塔？）のある仏寺（Stupa）を移転させ、イストド＝フラゼント慕闐（もじゃ＝マニ教団の最高位聖職者）の時代にマニ寺（Manisan）を破壊して仏寺を建て、……（という名の）マニ寺の内部の装飾をも剥ぎ取って、仏寺に据え付けようと運び、この神聖な大マニ寺の大講堂にある、上部に……のある絵画彫像を（奪い）取って仏寺を飾らせた。この覚え書に、私、アルグ出身のケド＝オグルは、非常に堪えられないような苦しみが至り、堪えられなくなる前に、マニ寺の様子をば（私は）書きつけよう。後の卑小者（マニ教信者）も理解するようにと（願って）、手短かに（その事情を）私は書き奉った。神よ！

不明な箇所は残りますが、マニ教寺院が破壊され、仏教寺院がそれに取って



図15：ベゼクリク千仏洞の仏教壁画の寄進者たるウイグル貴族たち。
出典：A. von Le Coq, *Die buddhistische Spätantike in Mittelasien*, III. Berlin, 1924.



図14：ベゼクリク千仏洞の仏教壁画の寄進者たるウイグル王子。
出典：A. von Le Coq, *Die buddhistische Spätantike in Mittelasien*, III. Berlin, 1924.



図13：ベゼクリク千仏洞の仏教壁画の地獄絵。
出典：A. von Le Coq, *Die buddhistische Spätantike in Mittelasien*, IV. Berlin, 1924.

替わりつつあることを伝える生々しい文書であることは疑いありません。そしてこの由々しき事態がウイグルの支配者階級の承認の下に進行していることも、文脈から窺えるのです。それだけでもこの文書の価値は極めて大きいのですが、さらに幸い且つ重要なことに、二箇所に六十支の紀年と統治者の名前が記されており、上記の癸未年が西暦の九八三年に、その前のテキストを引用しなかった前半部分にある甲寅年が九五四年に比定されるのです。一方、仏教の棒杭文書の冒頭に見える戊申歳（つちのえ・さるの年）が、一〇〇八年でなければならぬことも、私は博士論文以来、折に触れて論じてきましたが、今やその見方は学界でほぼ完全に認められています。つまりこの遺跡^aは元はマニ教寺院であったのに、一〇世紀後半から少しずつ仏教

側から浸食され、遂に一〇〇八年には仏教寺院に建て替えられてしまったという事です。

以上のようにウイグル仏教壁画は早くても一〇世紀後半以降、主要部分は一一〜一二世紀に編年すべきであるという私の主張は、幸い二〇〇〇年以降になって科学的にも裏付けられることになりました。それはドイツ隊将来で現在はベルリン所蔵、大谷探検隊将来で現在はソウル所蔵のいくつかのベゼクリク壁画断片が、カーボン14による放射性炭素年代測定にかけられた結果、九〜一〇世紀と見なされることが多かった有名な地獄絵【図13】に對してA.D. 1140 ± 30 という数値が出ただけでなく、他のものについてもA.D. 1078 ± 28 とか、A.D. 1100年頃という数値が出たからです。この事実と上述してきた内容を合わせれば、ウイグル仏教壁画の年代が、早くても一〇世紀後半にまでしか遡らず、多くは一一世紀以降のものであることを諒解していただけたと思います。「はじめに」で述べたように、前近代の中央ユーラシアで豪華な壁画のある寺院や邸宅などの存在が確認されれば、それ自体がシルクロード貿易の繁栄を裏付けていると考えられるのです。ウイグル仏教壁画のために資金提供したパトロンは、壁画に描き込まれたウイグルの王族・貴族や富裕な商人一族^{いちぞく}などであり、【図14、15、16】。彼らが仏教壁画のパトロンとなったのは一〇世紀後半以降ではありますが、裏を返せば、ベゼクリク千仏洞の豪華なウイグル仏教壁画の存在そのものが、一一〜一二世紀にもシルクロードが繁栄していたことを証明しているのです。



図16：ベゼクリク千仏洞の仏教壁画の寄進者たる一族の男女。
出典：A. von Le Coq, *Die buddhistische Spätantike in Mittelasien*, V. Berlin, 1926.

7 カラハン朝〜西ウイグル王国〜西夏王国〜遼朝（契丹帝国）

中央ユーラシアのシルクロードを支えたのはラクダや馬やロバなどで構成されるキャラヴァン（隊商）です。キャラヴァンのことをウイグル語を含む古代トルコ語ではアルキシユ（Altai）、漢語では「般次」といいます。「般次」がキャラヴァンであることを早くに指摘した藤枝晃はこれを「公営の隊商」とみなしたのですが、実際には私的な貿易に従事するキャラヴァンも含まれます。

一方、アルキシユは既に八世紀前半の突厥碑文に、モンゴル中央部のオテケン山地方に本拠を構えて各国と隊商貿易をしていれば突厥帝国は安泰であると告げる文脈や、東部天山北麓にいたバスマル遊牧集団が突厥宮廷に恒例のキャラヴァンを送らなかつたために征伐されたという文脈で見えています。これらはいかにも官営の隊商活動のように思われがちですが、当時の歴史的背景を考えれば、ソグド商人主体の民営ないし半官半民の隊商貿易がなかつたはずはありません。

そもそも、高価な商品を運ぶキャラヴァンは盗賊に狙われやすく、当然ながら軍事力を備える必要があるものであって、もともと「半官半民」的性格を取りがちなのです。そして私が蒐集・編纂した敦煌トゥルファンほか出土のウイグル文手紙文書約二百件のうち、古い書体で一〇〜一一世紀前後とみなされる手紙にアルキシユが現れるものは十数件に及びますが、そこには私的な手紙とマニ教徒に関わるものが目立っています。原文と英訳は全て拙著 *Corpus of the Old Uighur Letters from the Eastern Silk Road*. (Berliner Turfanlexie 46, Brepols 2019) にありますが、ここでは一例の写真を掲げます【図17】。



図17：ウイグル文手紙文書。
出典：新疆吐魯番地区文物局（編）『吐魯番新出摩尼教文献研究』北京、文物出版社、2000。

陶器も輸出されたことが分かっています。

もちろん貿易は一方的ではあり得ませんから、逆にカラハン朝から遼へ、おそらく西ウイグル王国や西夏王国を通じて輸出されたものとして、コータンの玉や乳香やガラス器（いわゆるイスラム＝ガラス）やアラビア文字銘文付きの

アルキシユについてさらに興味深いのは、同時代の西ウイグル王国の西隣にあったイスラム国家カラハン朝で残された二大文献の記載であります。そのうちのひとつ『クタドウグ＝ビリク（幸福を与える書）』には「Xitay anqisi yadit 𐰽𐰺𐰍𐰏𐰤 契丹のキャラヴァンがタブガチの商品を流布させた」と書かれています。キタイは契丹であり、この時代は遼朝です。タブガチは元来は鮮卑系拓跋氏の建国した北魏を、次いで北朝・隋唐帝国を指しましたが、この時代は疑いなく宋朝（北宋）を指しています。遼朝のキャラヴァンがもたらす「タブガチの商品」とは、宋の絹織物をはじめとする高級商品を指しているのです。

一方、カラハン朝のもう一つの文献遺産であるカーシユガリーの辞書『トルコ語アラビア語総覧』には、「キャラヴァンが遠くの土地の情報をもたらす」とあるだけでなく、宋代の四川地方で特産となった高級絹織物の「鹿胎／緑胎」が、ロクタイイlogayとして載録されています。漢語名がそのまま借用されたのです。さらに同じく当時的高级絹織物であるジュンキム jünkin「絨錦／戎錦」についても、カーシユガリーの辞書に zünqim という語形で載録されており、これまたカラハン朝で流通していたことが分かるのです。このジュンキムが、一〇世紀前後の西ウイグルで流通していたこと、また一一世紀初には遼朝から西ウイグルを通じてガズナ朝の سلطان への贈り物とされたことは、既に私が博士論文で論証したところです。

このように中国産の高級絹織物を表わす特殊な術語がカラハン朝にまで伝えられ、流布していた事実は、北宋から遼（契丹）へ、そして天山地方の西ウイグル王国、ないしは河西回廊を押さえていた西夏王国などを經由するキャラヴァン貿易が盛んであったことを想定させずにはおかないのです。さらに遼からカラハン朝を初めとするイスラム世界へは、麝香や高級毛皮や

金属容器があり、さらに驚くべきことに、遠くバルト海から運ばれてきた琥珀トルコ石さえあるのです。バルト海産の琥珀はおそらくブルガールやホラズムを通じてカラハン朝へ、さらに西ウイグルや西夏を通じて遼へもたらされたものと考えられます。実際に近年発掘された遼の複数の王族墓からは、大量の琥珀の装飾品が、イスラム地域でも西アジアではなく中央アジア産のガラス器などと共に出土しているのです。

（了）



もりやす・たかお
1948（昭和23）年福井県坂井市生まれ。東京大学文学部東洋史学科卒業、同大学院在学中にフランス政府給費留学生としてパリに留学。1981年同大学院人文科学研究科博士課程単位修得退学。金沢大学助教授、大阪大学助教授、同教授、近畿大学特任教授を経て、現在は大阪大学名誉教授・東洋文庫監事兼客員研究員・奈良県立大学ユーラシア研究センター客員研究員。博士（文学）。専門は東洋史のうちの内陸アジア史で、シルクロードの文化交流史や遊牧騎馬民族の世界史的意義などを研究。『東西ウイグルと中央ユーラシア』名古屋大学出版会2015年、『シルクロードと唐帝国』講談社2007年（同文庫版：講談社学術文庫2016年）、『シルクロード世界史』（講談社選書メチエ）講談社2020年 など論著多数